

八郎太郎の伝説 (三)

山本郡八竜町大谷地 畠山重顕 (77才)

^{とき}ある時がら、八郎潟の主、八郎太郎があそこの一の目潟の主の姫に毎晩通うよになったど。
それで、姫がうるさくてなんともならねくて、姫が武内という神主さ、枕神に立って「なんとかが
八郎太郎を追いはらてくれ」と念願したど。

それで、当時の武内の神主がよまの何時の刻に来るといふ時に、待ちかまえたど。八郎太郎は来
^{けんまく}るには、雲をたてて、騒々しい見幕で来たど。それで、今度、神主、弓よったどどで、よく八郎太
^{かたまたま}郎の片眼に当たったど。

それから八郎太郎来なかったど。

そして、そのいわれだが、一の目潟の鮒は、今でも、片びこの^{まなく}服だど。